

# 科学

✉ kagaku@asahi.com

がん細胞を攻撃する「キラーT細胞」が体内で作られる際に必要な分解酵素を、徳島大の高浜洋介教授(免疫学)らが突き止めた。胸腺と呼ばれる臓器の中に、たんぱく質分解酵素がカギになっていた。キラーT細胞を人工的に作る研究につながり、がんの治療法研究にも役

## がん攻撃「キラーT細胞」

### 生成のカギは胸腺内の酵素

立つ成果だという。キラーT細胞は、免疫機能を担う白血球の一種。ウイルスや、**徳島大教授ら発見**がん細胞などを殺す作用がある。キラーT細胞は、心臓上部にあるこぶし大の胸腺で作られることは知られていたが、生成の

仕組みは分かっていたいなかった。徳島大の高浜教授らは、胸腺の中にある、たんぱく質分解酵素「胸腺プロテアソーム」の働きを調べた。遺伝子組み換え技術で、胸腺プロテアソームを作れないようにしたマウスと、通常のマウスでキラーT細胞の生成能力を比べた。この結果、こ

の酵素を作れないマウスは、キラーT細胞を通常の20〜25%しか作れなかった。また、このマウスのキラーT細胞は、ウイルスに感染した細胞を攻撃する能力も通常より低かった。この研究成果は、米国の免疫学専門誌「イミニュニティ」に掲載される。(柳沢敦子)